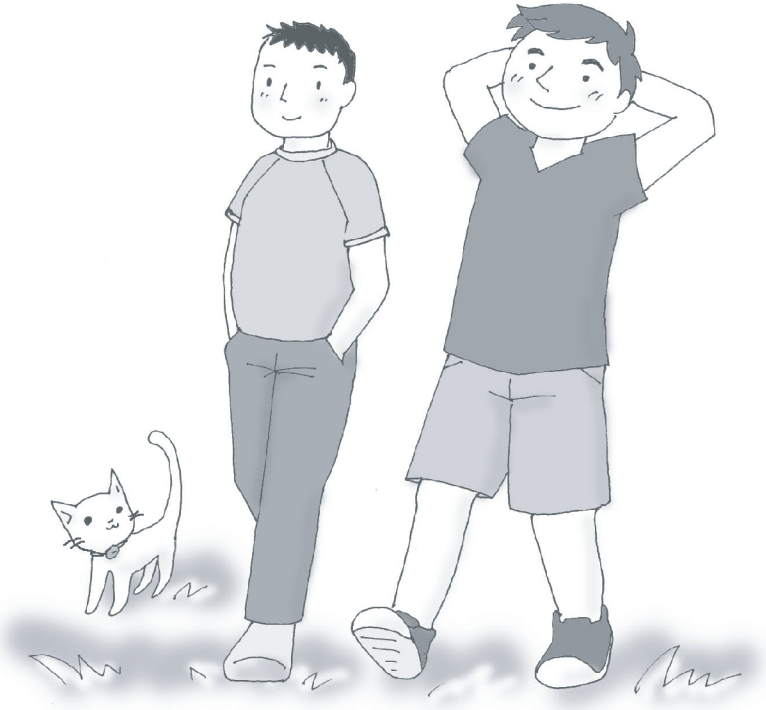
知的障害者の権利擁護システム構築に関する研究事業

コミュニティフレンドをご紹介します

「コミュニティフレンド事業」ガイドブック



社会福祉法人
全日本手をつなぐ育成会

目　次

■　それぞれのコミュニティフレンド
　かよさん（24歳、軽度の知的障害）の場合　～ 2
　しんじさん（35歳、中度〜重度の知的障害）の場合　～ 4
　コミュニティフレンドとバックアップ機関　～ 6

■　コミュニティフレンドはこんな人です　～ 8

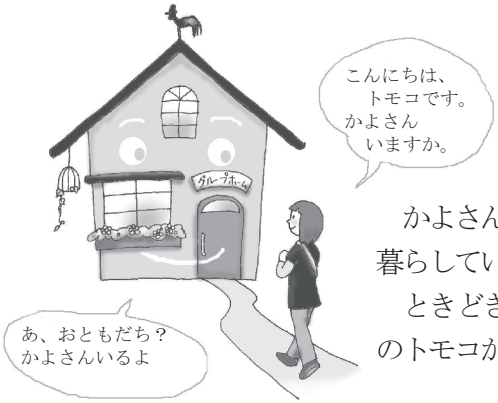
■　コミュニティフレンド事業に加わって
　「もっと自然なおつきあいを」　～10
　「だって、ともだちだから」　～11
　「コミュニティフレンドとして」　～12
　「コミュニティフレンド活動に期待します」　～13
　「息子のコミュニティフレンド」　～14
　「コミュニティフレンド利用者として」　～15

■　ＰＡＣガーディアンズとコミュニティフレンド　～16

■　宇治市社会福祉協議会のコンタクトパーソン活動の取り組み　～18

■　スウェーデンのコンタクトパーソン事業　～20

かよさん（24歳、軽度の知的障害）の場合



かよさんはグループホームで暮らしています。

ときどき、コミュニティフレンドのトモコが訪ねてきます。

「かよさん、こんにちは。おじゃまします。」

「うん、こんにちは」

「このまえはきゅうに予定かわってごめんね。」

「いいよ。それより、電話、うれしかった。」

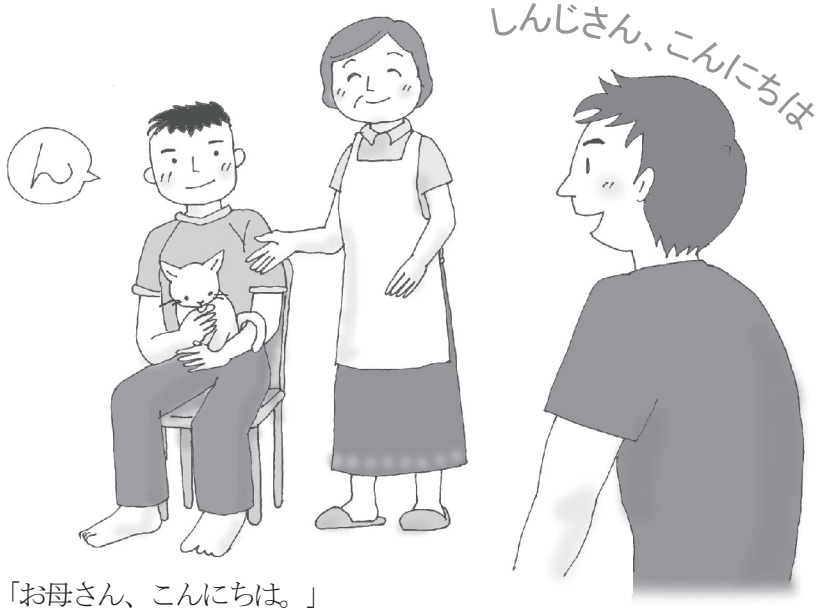
「あ、髪切ったのね。」
「うん、切った。」
「いいじゃん、似合うよ。」
「少し染めたいんだけど」
「そう？　染めなくても良いと思うけど。でもするんだったらこの写真の色なんかどうかな。」
「この人好きだなー」

いつもはこんなふうに会話しています。
　必要なことがあったら、トモコはかよさんの相談に乗ったり、少しお手伝いしたりするでしょう。ともだちだから。
　でも難しくなったら、専門のヘルパーさんに頼んだり、バックアップ機関に対応を依頼するようにしています。

　次回はもらったチケットがあったので、
サッカーを観戦する予定です。
地元チームのサポーターとして、応援に行きます！

しんじさん（35歳、中度〜重度の知的障害）の場合

しんじさんは自宅でお母さんと一緒に暮らしています。
コミュニティフレンドのトオルは、しんじさんの家を訪ねました。

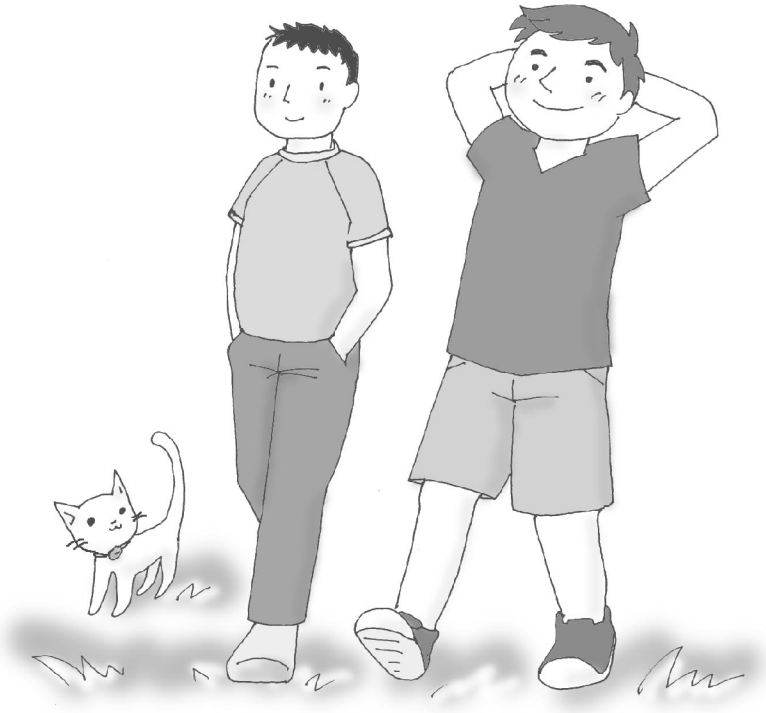


「お母さん、こんにちは。」
「あ、ちらかしててすいません。この前は電話ありがとうございました。しんじに電話をかける人がいるなんて初めてだわ。電話の後、嬉しそうでしたよ。」

しんじさんのペースに合わせてゆったりと過ごします。会話は少ないけど嫌ではなさそうです。トオルもこの時間が好きです。
近所を散歩したり、一緒に出かけることもあります。ガイドヘルパーはいるけれど、それとはまた別の気軽な外出です。出かけなくともいい。

この関係をしんじさんがどう思っているのかよくわかりません。でもトオルはしんじさんが好きだし、
しんじさんも

と言ってくれるから、それで良いと思っています。



お母さんと雑談中、将来の話になりました。何でもやれるわけじゃないけど、コーディネータを紹介したり、彼のことを知っている人間として、ちょっとはお手伝いできるかなと思いました。

コミュニティフレンドとバックアップ機関

コミュニティフレンドのヒサコはバックアップ機関に報告書をメールで送信し、そのときに“誰か他の人と一緒に出かけても良いか？”と質問しました。

すると次のような返信が。

「…質問拝見しました。ヒサコさんのお仲間ですね。全部で３人で遊園地ですか。

特にかまわないと思います。お仲間がかよさんのこともわかっていて、互いに気を配れるようにしていただければ。よろしかったらその後の感想なども教えてください。他にも小さなことや、手に負えない難しそうなこともあったら教えてくださいね。」

コミュニティフレンドは、バックアップ機関と定期・不定期に話し合いをしています。

普段は活動報告書やメール・電話での相談ですが、たまにこうして実際に会って微妙な話や上手く言えないことなどを伝えるようにします。
また他のコミュニティフレンドの意見や考えを聞くにも良い機会です。

「…この前は割り勘にしたんだけど、それでいいんだよね？」
「ぼくはそうしてますよ。」
「私のときはお母さんからこれも持ってけって言われて、お金渡されそうになったんだけど、いえ、自分で食べる分は自分で払いますからって。」

コミュニティフレンドはこんな人です

■コミュニティフレンドは「まちのなかのともだち」

コミュニティは“まち・地域”、フレンドは“友だち”ですから、コミュニティフレンドは、そのまま「まちのなかのともだち」という意味です。１対１の関係をつくるのが基本です。

コミュニティフレンドは友だちですから、障害のある人の家やグループホーム、施設を訪問して（遊びに行って）ご本人に会います。会ってから何をするかは二人の希望や好みで決めていきます。買い物に出かけたり遊びに行ったりしても良いですし、部屋でＣＤを一緒に聞いたりゲームをすることもあるでしょう。それから話すだけでも。

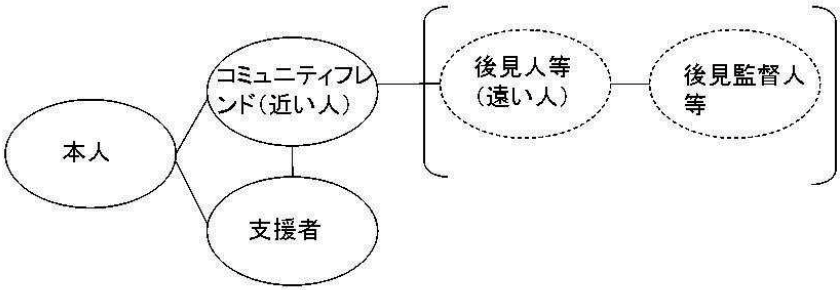
また必要に応じて支援の相談に乗ったりつなぎ役をすることもあるかもしれません。スウェーデンではコミュニティフレンドに近い人（コンタクトパーソン）が相談相手になったり、ちょっとした手紙を書く手伝いをしたり、あるいは話し合いの場に参加する支援をすることもあるそうです。定期的・本格的な支援業務に付くことはできませんが（だって本来の役割を無くしてしまうから）、ご本人に近い立場としてときに力になることもあるかもしれません。基本はともだちです。

このように二人の関係を作り、それをつなげていくことで社会との接点も広げていきます。

■障害のある子どもは、地域で長くいろんな暮らしを広げます

障害のある人は、学校を卒業して地域で暮らすようになってからずっと長い時間を過ごします。その間にはいろんな人との出会いや別れもあ

るでしょう。親・きょうだい・親族との別れもあるかもしれません。生活のニーズも変化するはずです。長く変化のある時間を支えてくれる人や仕組みが必要です。たとえ“親亡き後”になっても、近くにいて本人の気持ちを潤してくれる人と、支援の手と、それから少し遠くでがっちりと守る人が必要だと考えます。すると、がっちり守る人として成年後見が役に立つかもしれません。しかし成年後見人等がいつも傍にいるわけではありませんし、権限の強い人がいつも近くにいるのはかえってご本人には良くないかもしれません。ここぞと言うときにきちっと出てくる後見人。…すると支援者に加えて、やはり身近で“他でもないあなたと関わっている”という人が大切になってきます。そのような人として考えたのがコミュニティフレンドです（図参照）。



■やり方はいろいろ。

実際、このような活動を始めているところが既にあります。私たちは彼らの活動を学びながら、このコミュニティフレンドという人を考えました。いろんなやり方があると思います。その例をこれから紹介しますので、自分たちに合った活動を作っていってください。

（筑波大学大学院人間総合科学研究科　名川　勝）

〜コミュニティフレンド事業に加わって〜

『もっと自然なおつきあいを』

私は４０歳代の普通の会社員で、数年前に障害のある人の関係のボランティアを始めました。「ボランティア休業」という会社の制度を使って、２年間ボランティアばかりの生活をしたことがありますが、現在は復職して月に２日くらい休日を使って活動を続けています。コミュニティフレンドには、「障害のある人を地域の人も含んだチームで支援する」という考え方に共感して参加しました。

Ｎさんとは、グループホームで雑談をしたり、ボーリングやショッピングセンターに行ったりしています。まだ３回会っただけですが、同じ男性で年代も近くコミュニケーションもとれるので、今のところ自然におつきあいが始まっているという感じです。これから何度か会っていくうちに、お互いに楽しい時間をすごせる関係が、徐々にできていくといいなぁと思っています。

気をつけているのは、福祉サービスを提供するプロやボランティアではなく、友人としてＮさんとの時間を過ごすことです。もちろんＮさんの行きたいところに行くことも多いのですが、私の買い物につきあってもらったり、私の好きなことの話を聞いてもらったりもするようにしています。

私には、休職していた頃からのつきあいで、友人に近い関係の（障害のある）人が他に複数います。そのため、「仕組みとして友人関係をつくっていく」というこの活動には、率直に言って若干の違和感があります。しかし、地域のひととの関わりをもっと増やしていくには、コミュニティフレンドのような仕組みが必要だと思います。コミュニティフレンドの活動が広がっていって、私のようなごく一般の地域の人が、障害のある人ともっと自然におつきあいできるようになればいいなぁ、と期待しています。

（コミュニティフレンド　池上　直樹）

〜コミュニティフレンド事業に加わって〜

『だって、ともだちだから』

「コミュニティフレンド」地域のともだち・・・。「ともだち」という響きは何か楽しく、あったかい気持ちになります。そんな「ともだち」という言葉に新鮮なものを感じ、「なんかいいじゃない？」そんな軽い気持ちでコミュニティフレンドを始めました。

私のパートナーさんは、生活の中に決まったパターンがあるほうが落ち着く、知的に障害のある人です。彼は、私が以前支援員として勤務していた通所更生施設の利用者さんで、私たちは「施設支援員と利用者さん」という関係でした。それが「コミュニティフレンドとパートナーさん」という関係になり、知っている者同士であるはずなのに、何だかお見合いのような新鮮な緊張を感じたのが第一回目でした。会う回数を重ねる度に、施設ではすることのなかったお話が聞けて、知らなかった一面を発見します。初めて、電話でおしゃべりもしました。支援員のときには知らなかった顔を見ることが出来、毎回が「へぇ〜！そうなんだぁ」の連続です。「ごはん何食べてきたの？」「きょう何時に起きたの？」「今日ヒット打ったよ」「今度はいつ来るの？」そんな言葉は、毎日何かの目的を持ってたくさんの方が過ごしている中では、彼が私に発することは、なかったのです。

何かをするために、そこにともにいるのではなく、お互いの気の向くままにコミュニケーションを交わす。だって「ともだち」だから。この関係は、サービスを利用する中や家族との生活にはない、新しい扉を開いている気がします。いつか何かの時に、彼の横で彼の目線で、味方になってあげられる存在になれたら嬉しいな、と思っています。

（コミュニティフレンド　藤森　鮮英）

〜コミュニティフレンド事業に加わって〜

『コミュニティフレンドとして』

私がコミュニティフレンドとして活動させて頂いて３ヶ月になります。私のパートナーさんは施設に入所されているため、職員の方たちが日夜努力されて築いた安定した生活のリズムを壊すことになっては、何の意味もないと思っています。彼女とは十年来の知り合いですが、繊細で変化への適応が難しい方なので、何を感じどうしたいのか、表情も含め行動に表れることをたった数時間でも逃さず見ていないと彼女を苦しめることになります。

彼女にとって十年前の私は指導員でした。今コミュニティフレンドと名前が変わっても同じ人間です。私をどう認識してくれているのか、わかりませんが、友達としてお付き合いをしたいと思っています。

先日迎えにいくと頭から布団を被って出たくないという様子です。「今日は、外に行かないの？」と尋ねるとうなずいてくれます。何度か誘ってみても動かないので、隣にどっかり座り込みこんな時間も悪くないと能天気な私は思っていましたが、私に来て欲しくないのかもしれませんし、ただ眠いのかもしれません。それでも彼女なりの訴えには違いないと思います。

彼女は正直です。計算も詭弁もありません。与えられた環境で懸命に生きている彼女に会うと、自分の生き方を深く考えさせられます。そんな彼女と友達として、普通のことを普通にしたいと思っています。我が家に招いて家族や私の友達と一緒にお茶を飲む、買い物に行く、ドライブをする。思いついたことを試してみようと思います。特別なことは他の方々にお任せして、少しでも笑顔を見せてくれるには何をしたらいいのか試行錯誤ですが、ホッとしてくれる場所に私がなれたらいいと思っています。

私にこの機会を与えて下さったＰＡＣガーディアンズの方々、そして優しく受け入れて下さる園の職員と他の利用者の皆さん、なにより彼女のお母様に感謝して続けていきたいと思っています。

（コミュニティフレンド　松本　智子）

〜コミュニティフレンド事業に加わって〜

『コミュニティフレンド活動に期待します』

コミュニティフレンドの活動について話を伺ったときに、真っ先にグループホームで生活する障害のある人に勧めたいと思いました。それは、グループホーム入居者への支援に対して、私自身が壁にぶつかっていたからです。

私は福祉施設からのバックアップ職員として、グループホーム入居者の支援に入っています。実は、「支援」という言葉が私の中での大きな壁なのです。私の理想だけで物申すと、支援ではない関わり方をしたい、ごく普通に親しい仲間としての関わりを多く持ちたい、多くの人と関わる機会を持たせたい、そんな想いが強くあります。しかし、入居者は私のことを施設職員としてみている、そこに壁があるのかなと感じているのです。そこで、どのようにしたらよいのか考えていくと・・・答えの一つとして、福祉に関係する人以外との関わりが大切であると考えたのです。つまり、地域の人、身近な人、親しい仲間の存在や付き合いが生活の中の一部にあってほしい、それを叶えることができるのが、このコミュニティフレンドであると感じました。

今、実際にコミュニティフレンドの活動に関わりを持っている入居者のNさんには、同世代の方がつき、ごく自然な付き合いの中からニーズを汲み上げて、友達として当たり前のように付き合っています。これだけでも、コミュニティフレンドの価値の大きさを早くも魅せられた様な気がします。この２人が今後どんな関係を築いていくのか、今から楽しみで仕方がないのです。さらに嬉しいことに、他の親たちから「うちの子とも関わってもらえないだろうか？」と、ご要望もいただきました。すでに周囲からの期待が大きいことを伺わせています。

地域で障害のある人々と関わる人たちが増え、自然な関係で街中を歩いている、理想的な画が現実のものとなることを今日まで強く願っておりましたが、そうなる日が決して遠くないと、今回のコミュニティフレンドの活動を通じて確信に変わりました。これからコミュニティフレンドの活動が多くの地域に広がっていくことを期待しております。

（知的障害者通所更生施設・あけぼの園　小柴　友幸）

あけぼの園は、グループホームのバックアップ施設です

〜コミュニティフレンド事業に加わって〜

『息子のコミュニティフレンド』

息子は37歳、重度の知的障害者です。いずれは成年後見制度を利用することを考えていますが、まだ親が支えていたいという思いと、どのような後見人(家族、第三者、または法人など)がいいのか見極めがつかず、迷っています。

〔船橋市手をつなぐ育成会〕の仲間とともに「委員会」を立ち上げ、模索中ですが、ＰＡＣガーディアンズとの出会いもそのような取り組みの中でした。

ＰＡＣガーディアンズのコミュニティフレンドを知り、早速応募しました。息子の敬愛する元通所施設職員(女性)さんはこれまでも時折、我が家へ立ち寄ってくれ、一緒におしゃべりをしたり、夕食を共にしたり楽しいお付き合いをしてきました。その彼女は今、他市の生活ホームの世話人としての仕事の傍ら、社会福祉士の資格を取得するために勉強中ですが、障害者に対する姿勢、ハートはコミュニティフレンドにピッタリです。

10月からコミュニティフレンドとして新たなお付き合いが始まり、先日2回目が終わりました。息子は「コミュニティフレンド」の意味は理解出来ませんが、彼の目線で付き合ってもらえるので、満足げです。

次回は彼の暮らすケアホームを訪問してもらおうと考えています。ケアホームでは4人の仲間と、世話人(1名)、サポーター(1〜2名)に助けられながら暮らしています。彼の部屋は７帖ほどの個室。コタツやソファが備えられていて、親がそこにいないぶん、寛ぎ、語らうにはもってこいの場所と言えるのではないでしょうか。息子もその日を楽しみにしています。

コミュニティフレンドとのお付き合いが永続的に出来るなら、親族が後見人になり、コミュニティフレンドとともに複数後見のような形で見守っていくことが可能になるのではないかと期待しています。

(船橋市手をつなぐ育成会　赤津　保子)

〜コミュニティフレンド事業に加わって〜

『コミュニティフレンド利用者として』

コミュニティフレンドの事を知った時、思わずそれ何かとても良いと思いました。息子が友達を求めている事を感じてはいても、身体の機能、手足（脚）もうまく働かせる事できず生活上の困難に精神面の問題も加わり、対応の支援の事ばかりに追われ、この辺の事をじっくり考える事に中々及びませんでした。案外ポイントはこの辺にあり、時々一緒に友達のような人がいてくれたり、そんな中で本人の事を知っていってもらえたら、息子の心持和らいで生活変わってくるかもしれないと。些細な事柄、言葉に大騒ぎしたりと心傷つき易い面あり、その度お世話をお掛けする事の回りの事ばかり気になり、本人の気持は解り難いからとなおざりにしていた様に思う。友達だったらこんな事しないよね、言ったりしないよねとこの様な何気ない事を回りの皆で考えていく事今からでも遅くない。解らないから大丈夫はない。本人達は直感は優れているのでうっかりできない。この様な親の思いあり、コミュニティフレンドさんには申し訳ない位期待していますが、それだけに友達なら無理せずゆっくりじっくり付き合っていってほしいと思っています。１０月より何度も息子の暮らし始めたホームに行って頂き、その時は部屋で嬉しそうに一緒に過ごしているとか。試行なのに試行でなく息子とコミュニティフレンドさんとの関わりがもう生き生きと伝わってきています。障害のある人もそうでない人も人として認め合う関係が正に友達と思います。今後は様々なお付き合いの中味について本人になり相談させて頂けたらと思っている所です。

（市川手をつなぐ親の会　浜本　真知子）

ＰＡＣガーディアンズとコミュニティフレンド

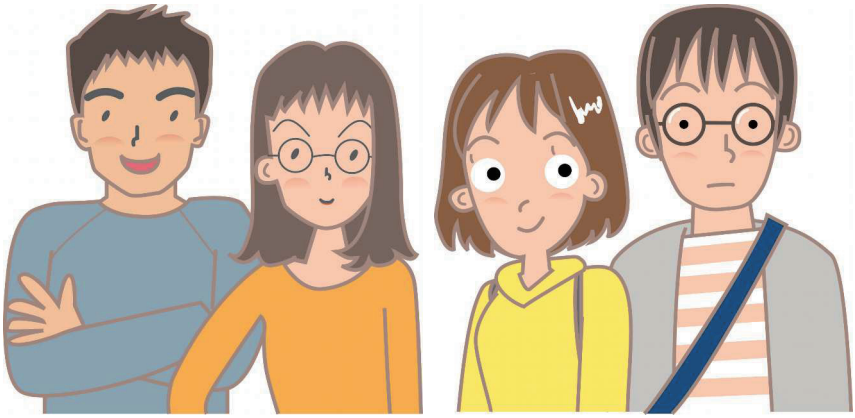
PACは〈ぱっく〉と読み、「プロテクション＆アドボカシーちば」の略です。千葉県内に出来た障害者の権利擁護に関する活動を行っている民間の団体です。その中で、主に成年後見について活動する別働隊としてＰＡＣガーディアンズが結成され、平成１７年１２月にＮＰＯを取得しました。弁護士・研究者・育成会の親たち・社会福祉士・精神や知的の事業所職員などが参加をしています。ガーディアンズというのは、後見人という意味です。活動の内容は、成年後見人の養成研修、後見人の受任、後見人へのバックアップ、相談、啓発活動などです。

活動の中で、後見人だけでは足りないものとして、街の中の友達という意味合いをもつコミュニティフレンド事業の試行を始めています。障害のある人を取り巻く人的な関係は、家族か福祉サービス従事者に多くは限られています。が、人の暮らしは、もっと多くの人たちとのかかわりの中で成り立っています。そこにこそ、人生の豊かさもあるわけです。いまではＰＡＣガーディアンズの大切な活動の一つになっています。多くの可能性を秘めていると考えられますが、形が定まったものではなく、各地域での工夫が求められると思います。現在は、７組のコミュニティフレンドさんと利用者さんがいます。作業所の職員では出来ないことを、施設職員だったときにやりたかったことを、今までも普通にやっていたことを、とそれぞれがそれぞれの思いで、障害のある人の友達として関わっています。また利用者さんの親御さんは、新しいグループホームに入った息子さんの友人としてホームを訪れてくれるコミュニティフレンドさんに、期待をしています。またある親御さんは、家族にではなく、

子どもに会いにきてくれる人としてのコミュニティフレンドさんに期待をしています。

今は月２回くらいのペースで、利用者さんのもとを訪れ、それぞれの付き合い方をしています。ＰＡＣガーディアンズは、バックアップ組織として、コミュニティフレンドさんの相談や研修にあたっています。どの人にも、地域の友達ができるよう、この後の課題は、人材の確保だと思います。またボランティア的活動ではありますが、やはり財政基盤も必要です。成年後見人とともに、このような存在も障害のある人のまわりには必要だと思います。

（市川手をつなぐ親の会　竜円　香子）



宇治市社会福祉協議会のコンタクトパーソン活動の取り組み

宇治市社会福祉協議会（京都府）のコンタクトパーソン活動を紹介します。

＜コンタクトパーソン事業とはなぁに？＞

コンタクトパーソンは、くらしのふれあい人、友だちと相談員を兼ねた人で、利用者が地域生活を営み、生活の質を高めるとともに、豊かな人間関係の環づくりの援助をします。そして、利用者ができるだけ自立して地域で生活が送れるように活動を行います。

＜どうしたら利用できるの？＞

宇治市社会福祉協議会事務局に相談し、利用についての説明をさせて頂きます。その上で、コーディネーターが希望される方の生活の様子やご希望についてお聞きし、それをもとに判定会議を行います。判定会議はおおむね３ヶ月に１回程度です。

＜利用するのにお金はかかるの？＞

ご利用になった場合、お金がかかります。
１ヶ月の基本料金：500円（ただし、１ヶ月の活動時間合計が１時間を越える活動の場合は、１時間を超えるごとに300円）別に、コンタクトパーソンの活動場所までの交通費は必要です。

＜どんなことができますか？＞

コンタクトパーソンの活動は決まる形はありません。自分たちの生活や生命を脅かすような活動以外は、利用する人とコンタクトパーソンが、話し合いながら決めていく活動です。

＜コンタクトパーソン活動をご紹介します！＞
○待ち合わせをして、映画を見に行きました。
○お仕事へ行く前のモーニングコール。少しの時間だが、電話でのつながりから、共通の趣味の話もしています。
○地域のボランティアが開催する催しへ参加しています。最初はゆっくりだったけど、最近は待ち遠しくてコンタクトパーソンが来る前から家で待っています。

活動をしている人の思いって？？　感想を聞いてみました！

私はこの活動を通して学んだことが三つあります。

一つめ目は、て定期的に訪問してコミュニケーションを図ることの大切さです。コミュニケーションを通して日常生活での心配事や悩みの相談、老いに対する漠然とした不安を語られることが増え、少しずつ心を開いて下さっていることが感じられました。

二つ目に、心の交流が図られる喜びです。最初は相手の一方的な働きかけを待ったり、受け入れようとすることばかりに気持がいっていましたが、回数を重ねるたびに私からも話題を提供したりすることができるようになりました。

三つ目に、自己肯定感を確立してもらうことが前向きな人生を送る上で不可欠なことがわかりました。

宇治市社会福祉協議会作成「コンタクトパーソン事業のご案内」より一部を転載させていただきました。ご許可くださいました宇治市社会福祉協議会様に御礼申し上げます。

スウェーデンのコンタクトパーソン事業

１．はじめに

スウェーデンのコンタクトパーソン事業は各種法律に明示、制度化され、全国で利用されている福祉サービス事業です。コンタクトパーソン事業を利用しているのは、2006年10月現在で16,660人です。スウェーデンの知的障害のある人たちの総数が約38,000人ですから、半数近い（約44%）人たちが利用していることになります。

２．この事業はどのように広まっていったのでしょう

スウェーデンでコンタクトパーソン事業が始められたのは、1980年代に入ってからです。しかしその当時は、あまり利用されていませんでした。1991年にスウェーデン手をつなぐ育成会（ＦＵＢ）が「コンタクトパーソン啓蒙全国キャンペーン」を行い、その意義が広く知られるようになっていきました。その結果、コンタクトパーソンになってくれる人が飛躍的に増えました。

３．コンタクトパーソンはなぜ必要なのでしょうか

ＦＵＢ関係者は、コンタクトパーソンがいることで、個人的関心を発達させ、自分の友達を持ち、他の人と同様の個人的ライフスタイルを持つことができると考えています。

４．コンタクトパーソンとはどんな立場の人でしょうかコンタクトパーソンは、社会とコンタクトをとる援助や意義のある余暇活動が行えるような援助、他の人とコンタクトを取れるようにするための援助をするという役割をもっています。つまり、社会で他の人々と同じように生活できるようにするための人的援助の「環／鎖」となる立場の人です。

コンタクトパーソンが行う活動の内容は、買い物や手紙の返事の書き方の手伝い、職員との話し合いの手伝い、社会参加の手助けなどさまざまです。友達になったり、相談相手をすることもあります。

５．どうしたらコンタクトパーソンが持てるようになるのでしょうか

コンタクトパーソンを持ちたいかどうかは、本人および家族の人が本人と相談して決めます。コンタクトパーソンになれるのは、本人と気軽に付き合え、彼らの相談相手になってくれたり、友達になってくれるなら、誰でも構いません。資格は一切問いません。受付は、各自治体の福祉の窓口で行います。コンタクトパーソンには、若干の手当てが支給（月に1万円程度）されます。

６．コンタクトパーソン事業は日本にも導入が可能なのでしょうか

資格は問題にされませんので、学生・主婦／主夫・高齢者・一芸に秀でた人・傾聴できる人など、誰でもコンタクトパーソンになることができます。

スウェーデンのコンタクトパーソン事業を参考に、日本でも育成会が中心となって試行的取り組みを行い、事業として展開すれば、いずれは制度として定着させていくことができるのではないかと思います。

（立教大学コミュニティ福祉学部　河東田　博）

編集者

知的障害者の権利擁護システム研究プロジェクト
「コミュニティフレンド」小委員会

委員長　名川　勝　筑波大学大学院人間総合科学研究科
委　員　田川　正浩　ＮＰＯ法人ひだまり
委　員　田辺　寿　伊賀市社会福祉協議会
　伊賀地域福祉後見サポートセンター
委　員　石原眞季江　ＮＰＯ法人ころばぬ先
委　員　竜円　香子　市川市手をつなぐ育成会

知的障害者の権利擁護システム構築に関する研究事業

コミュニティフレンドをご紹介します
「コミュニティフレンド事業」ガイドブック

発 行 日：2007年1月31日
発 行 者：藤原　治
発 行 所：社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会
〒105-0003　東京都港区西新橋2-16-1
全国たばこセンタービル8階
TEL03-3431-0668　FAX 03-3578-6935
http://www1.odn.ne.jp/ikuseikai/
E-mail：ikuseikai@pop06.odn.ne.jp
印 刷 所：株式会社パンメデア
イラスト：武井陽子（表紙・P2ー7）